

看護の可能性

痛い。熱い。苦しい！

体の不調を感じた時、私は子どもの頃高熱を出したことを思い出します。幼い私はベッドに横たわり、涙でぐちゃぐちゃの顔で、うんうんと苦しげに唸りながら寝返りを繰り返しています。隣の部屋のお母さんが声を聴きつけ、来てくれるのを待っているのです。

私はいつからか、つらいときに唸ることをしなくなりました。「おとな」と呼ばれる年齢になり、一人での生活を始め、どんなに唸っても隣の部屋にお母さんはいない、それが当たり前の生活になったのです。けれどそれでもたまに、例えば、病気になった時には、あの頃のように恥も外聞もなく叫びたい気持ちになります。「だれかそばにいて…！」

2011年3月11日、東日本大震災発生。その1か月後の4月11日、私は津波で壊滅した町に引っ越しました。初めて踏む北の大地。足を踏み出すたび地面は潮を吐き出し、所々、腐臭のする「毛布の塊」が横たわっていました。かつては町であった「もの」をかき分けたどり着いた小さな体育館で、避難所のスタッフとして、その町での生活は始まったのです。避難所での日々を、正しく表現する言葉を、私は持ち得ていません。家族でない人と肩を寄せ合い、重なり合うように寝起きする毎日。木片となった自宅へ戻り、大切な物や、あるいは家族の欠片を探す日々…。泥のように重く、沈み込み、まとわりつくようにのしかかる絶望と、けれどその奥から微かに届く、小さいけれど確かな光。哀しみと喜び、どちらも平時の何十倍、何百倍の質量をもって流れ込んでくる生活。そんな中、ある人が病を得ました。

頭痛と発熱を訴えたのは80歳代のKさん、漁師の旦那さんを支える、働き者のおばあちゃんです。Kさんの生活スペースはステージの片隅。暖かい布団も、栄養価の高い食事ありません。感染を受けそうな高齢者や子どもは少し距離をとり、Kさんの隣にはOさんという、60歳代の女性だけが座っていました。その日の光景を、私は未だに忘れることができません。KさんはOさんに手を握られて、幼い子どもの様に安らかな顔で眠っています。不安も苦しみも、ひとつとして口にせず。子どもを抱くお母さんたちも、2人を優しく見守ります。人が限界まで詰まった避難所での病。その不安も、感染の恐怖も消し去ったのは、Oさんの優しいその手、ただそれだけだったのです。

Oさんは、退職した看護師でした。「Oさんがいてくれるから大丈夫」 避難所で人々の心を守ったのは、清潔な療養環境でも、最新の特効薬でもなく、一人の元看護師の存在だったのです。その光景に、私は看護の限りない可能性を感じました。そこにいっただけで、手を握るだけで、不安を取り除き、安らぎを与えられる存在。私もいつか、そんな存在になりたい。その思いが、今、看護を学ぶ私の根本に静かに座っています。何も言わず、ただただ優しく手を握り続けた、あの日のOさんのように…